

見せかけの等身大

—『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』におけるキャラクターの力学—

佐野 一将

1 はじめに

ライトノベルとは「主として中学生から大学生にかけての学生を想定読者とし、まんがやアニメーションを想起させるイラストを添えて出版される小説群」「物語の作中人物も、まんがやアニメーションに登場する「キャラクター」として描かれる、キャラクター小説」(1)とおおむね定義できる、エンターテインメント要素の強い小説である。

ライトノベルは二〇〇〇年代前半の「ライトノベル・ブーム」を機に社会へ浸透していった。現在で

はその勢いは薄れつつあるものの、出版業界を筆頭に各所で様々な取り組みが行われ、ライトノベルは多様なメディアや文化と結びついて今なお成長を続けている(2)。

ライトノベル・ブームを支えるように、ライトノベルに関する批評や言説も二〇〇〇年代から盛んに行われ(3)、二〇〇〇年代の終わりからはアカデミックスな場でも言及されるようになる。「昭和文学研究」に久米依子や一柳廣孝がライトノベルに関する「研究展望」を載せている他(4)、ライトノベルを中心に扱った研究書(5)やマンガやアニメなどと複合して

論じる研究書(6)も出版されている。

こうしたライトノベルをめぐる研究に共通する点として、ライトノベルが多くの学問領域を横断して論じられることが挙げられる(7)。その一方、研究に用いられるライトノベルには偏りが見られる。大橋崇行は「研究では扱う作品」「のほとんどがゼロ年代(引用者注、二〇〇〇年代を指す)半ばの作品」であり、ライトノベルの「最前線の状況を追うことはほとんどできていない」と指摘する(8)。つまり、分析対象となるライトノベルは二〇〇〇年代のものに限られているため、二〇一〇年代のライトノベルに対する批評、研究が求められているといえる。

では二〇一〇年代を象徴するライトノベルを挙げるとすると、渡航著、ぼんかん⑧イラスト『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』(以下、通称である『俺ガイル』と略記(9))が最も適当だろう。その理由として、『俺ガイル』は「このライトノベルがすごい!二〇一四」(10)から三年連続で作品部門ランキング一位を獲得しており、同誌唯一の殿堂入り作品であること、マンガやアニメなど多方面にメディアミックス展開を行っていることが挙げられる。

『俺ガイル』の概要は次の通りである。主人公の比企谷八幡は捻くれ者で「ぼっち」な高校二年生。

彼は生徒指導の平塚先生に自らの孤独体質の更生を命じられ、悩める生徒の手助けをする部活、奉仕部に強制入部させられる。容姿端麗才色兼備な雪ノ下雪乃と、コミュニケーション能力が高く常に周りに気を配っている由比ヶ浜結衣とともに奉仕部で様々な活動をしていく中で、八幡自身や彼の間関係に変化が生じてくる……。

読者からの人気が高いキャラクターが多数登場する『俺ガイル』において、最も多くの支持を得ているのが比企谷八幡だ(11)。特に彼の独特な語り口や「リアル」な「ぼっち」エピソードに共感する読者は多く(12)、樋口康一郎も次のように指摘している。

カースト下位層でありながら、カースト上位の「リア充」グループのトラブルを解決していく比企谷は、オタクを自任するライトノベル読者にとって、リアルで、等身大のヒーロー像だった。(中略)読者は比企谷の日常と活躍に自己を投影していった(13)

しかし、『俺ガイル』の「リアル」な要素は八幡というキャラクター設定だけにとどまらない。八幡た

ちが過ごす学校の描写にも、現代の状況が強く反映されている。ライトノベルの想定読者が中学生から大学生であること、舞台設定に学校が多く用いられることも踏まえれば、読者やキャラクターが多くなる時間を過ごす学校を分析の軸とした検討も必要ではないだろうか(14)。

そこで本稿ではキャラクターたちを取り巻く学校空間、特に八幡たち主要キャラクターが所属する「奉仕部」に焦点を置く。『俺ガイル』が現実の学校をいかに取り入れ、どのようにキャラクターに還元しているか明らかにする。

2 学校空間に内在する二つの権力

八幡たちが通う学校は、千葉市立総武高校という架空の高校である。まずは一般的に学校がどのような場所であるかを確認する。

学校、特に国公立の学校は公的な影響が強い。広田照幸は、子どもたちが「望もうが望むまいが、「教育」とは、権力的な営みなのだ」と述べるが、ここで言う権力とは「公権力」を指す(15)。現代の学校のあらゆる要素は、憲法や教育基本法、学校教育法などを始めとする法令、すなわち公権力によって規定

されている。

ここで注目したいのが教員と生徒の関係性である。樋田大二郎らの調査によれば、近年「生徒から見た教師像はいっそう「親しみやすさ」を強めている」が(16)、そもそも教師は公権力によって規定された職業である。それゆえ「学校では、「教師―生徒」という垂直的な関係」(17)、つまり教師が上位の存在で生徒が下位の存在にならざるをえない。

それをよく表すのが教師による生徒の評価である。評価については文部科学省などが観点や規準、様式などを提示しており(18)、生徒は「教育課程」(19)におけるあらゆる活動の中で、教師からの評価にさらされ続けていることは明らかである。

『俺ガイル』においても、八幡ら奉仕部の活動の多くは「教育課程」に関連する事柄である。そうした活動のほぼ全てで教師、特に平塚の関与が描写される。平塚は親しみやすい教師として描かれる一方(20)、学校行事全般の担当を任されており、活動のたびに八幡たちを近くで見守り、評価や助言を与えるなど、公権力が規定する教師の職責を果たしている。また、総武高校は進学校という設定であり、ここに通う生徒たちのほとんどが大学進学を希望している。そのため、定期テストの順位や内申点、つまり

教師からの評価を気にする生徒も多く(21)、公権力の影響の強さは学校全体を覆っている。

このように、学校内における公的な事項によって権力が生み出される力学を以降、「オフィシャルな権力」と呼称する。

他方、「友人が多く、その多さが友人関係満足度にも大きく影響」している中高生にとつて、学校は「友だち」と親和性の高い場所」でもある(22)。そんな現代の学校では、友人関係の不和から生じる「スクールカースト」が常態化している。鈴木翔によれば、スクールカーストとは「同年年の児童や生徒の間で共有されている「地位の差」を指す。鈴木は中学・高校においての地位の差は「グループ間の力の差」であることを大学生からのインタビューにより明らかにした上で、上位グループと下位グループの特徴を見出している。主な特徴は次の通りである。

- ・ 上位グループの特徴
- ・ 気が強く、仕切り屋
- ・ 異性の評価が高い
- ・ 若者文化へのコミットメントが高い
- ・ 女子は容姿に気を遣う
- ・ 男子は運動ができるイケメン

・ 勉強は関係ない

下位グループの特徴

・ 地味

・ どのグループにも入らない生徒は最下層

さらに鈴木はスクールカーストが「権力としての人間関係」で成り立っているとし、上位グループは「自分の立場の優位性から、(中略)自分の思うとおりの行動をとることができ」、同時に下位グループは上位グループからの「制裁を恐れている」ことも発見する。このようなスクールカーストを生徒だけでなく、教師も生徒と同じように捉えている。

ところがスクールカーストは多くの生徒や教師に「はっきりと見えている」にも関わらず、「その力関係は公のものでもなければ、明文化されているわけでもない」(23)。両グループの特徴を見る限り、スクールカーストは生徒たちの主観による私的評価によって成り立つ関係だと言える。

こうしたスクールカーストは『俺ガイル』においても大きな影響力を持っており、その描かれ方も鈴木の本の言及と重なる部分が多い。八幡は自身が所属する二-Fクラスのスクールカーストを以下のように分類する。

教室にはいくつものコロニーが形成されている。男女混合一軍リア充、女子にちよつかいかけた二軍リア充、部活やつてるけど別にレギュラーじゃないスボルツメン、オタク集団、中堅どころ女子、おとなしめ女子。そして、ぼっちがぼっぼつ数名。そして、このぼっちにも数タイプある（三巻、一五六―一五七頁）

八幡は葉山たちを中心にしたグループを「男女混合一軍リア充」、つまりトップカーストだと認識する。その理由として、このグループには葉山や三浦をはじめとして容姿に優れた人物が多く属していることが彼らが明るく親し気に振る舞っていることが挙げられる。これらの八幡の見方は鈴木の見出した上位グループの特徴と一致する点が多い⁽²⁴⁾。加えて、八幡が「ぼっち」な自分を「カースト最底辺」と捉えている点も、鈴木指摘に一致する。つまり、現実存在するスクールカーストが『俺ガイル』においても同じように存在しているのだ。

このスクールカーストは八幡の周囲で非常に強力な権力として作動する。二―FクラスのHRや文化祭の催し物に関しては教師の関与は無く、トップカ

ーストのメンバーが取り仕切っている。また、三浦の機嫌が悪くなった際にクラス中が静かになったことや、「二位グループのトップ」の相模が八幡を嘲笑していたことから、クラス全体でカースト意識は共有されていると見ていいだろう。このようなカースト評価は、平塚が葉山たちを「イケイケリアリアな生徒」と呼称するように、教師にも共有されていることがわかる。

このように、スクールカーストは生徒による主観的な私的評価によって成り立つ権力構造である。このような権力構造を生み出す力学を以降ヘノンオフイシャルな権力と呼称する。

これまで学校が内在する二つの権力について確認した。前者を大学進学と繋がる「将来」を規定する要素、後者を人間関係と繋がる「現在」を規定する要素と位置付けたとき、これら二つの権力は対立関係にあるとみなせる⁽²⁵⁾。『俺ガイル』においても、同様の対立関係を見出すことができ、これらは相反する概念のように描かれている⁽²⁶⁾。しかし唯一の例外的な共同体がある。それが「奉仕部」である。

3 奉仕部の特異性

さて、前述しているように総武高校には奉仕部という珍しい名前の部活がある(27)。ここでは前述した二つの権力構造が奉仕部にどのように顕在化しているかを見ていく。

中澤篤史によれば、部活動の内容や形式、人材などは制度的には決められておらず、地域や学校によって違いがみられる(28)。それゆえ、奉仕部について考える際にも、テクスト内の記述から、その特徴を見出す必要があるだろう。本章では奉仕部の特徴を部室、部員、活動内容の三つに分けて論じていく。

まずは部室の位置について。奉仕部の部室は「特別棟の四階、東側。グラウンドを眼下に望む場所」にある。ここに行くためには教室棟と結ばれている渡り廊下を歩かなければならない。そのため、部室の周囲には人氣が無く、他部活の物音も聞こえない。このように、奉仕部は他の教室や部室と比べかなり離れており、それゆえ学校内の二つの権力の影響を受けにくい位置にある。裏を返せば、両方の権力構造が入り混じる可能性を秘めた場所でもあるのだ(29)。

続いて部員について。奉仕部は八幡、雪乃、結衣

の三人による部活である。八幡については後述するため、ここでは雪乃と結衣が二つの権力構造とどのように関わっているかを考察する。

雪乃は二つの権力のうち〈オフィシャルな権力〉を重視する人間である。雪乃は奉仕部の部長という肩書きだけでなく、普通科よりも偏差値が高い国際教養科に属する、学年主席の成績優秀者である。さらに雪乃は文化祭で副実行委員長の役職にもついでおり、教育課程における公的な評価では最上位に属する者の一人である。

雪乃の地位の高さは彼女の姉や母親と学校との繋がりにも現れている。文化祭実行委員長を決める際、姉の陽乃が二年前に実行委員長をしていたことから、文化祭顧問の厚木や生徒会長の城廻から実行委員長に推薦されており、公的に地位の高い者からの信頼も厚いことがわかる。また、雪乃の母と陽乃が学校に来た際、彼女たちは校内で唯一喫煙可能な応接室に通されるなど、学校側から「VIP待遇」を受けている。

一方、雪乃は過去の経験(30)から意図的に〈ノンオフィシャルな権力〉を避けている。それと並行するように、クラスメイトも彼女を「遠巻きに尊崇」しており、雪乃の周囲ではスクールカーストが成立し

ていないことがわかる。

このように、雪乃は「オフィシャルな権力」では極めて高い地位にいる一方、「ノンオフィシャルな権力」からは最も離れた位置にいる。

一方、スクールカーストが強力に作動している2―Fクラスにおいて、結衣は「男女混合一軍リア充」、つまりトップカーストに属する。結衣も自身がトップカーストに属していることに自覚的であり、その上で上位グループ内のカーストにも配慮するほど、人間関係に気を使っている。

そのような結衣がトップカーストたり得る理由は、上述の八幡の指摘通り、容姿と「コミュニケーション能力」を基にする友達の数之二点である。二―Fの女子については、スクールカーストの「女王」三浦が可愛いと思った子がトップカーストに入っている。現にオタクというカースト下位要素を持つ海老名がトップカーストに属する一方、一年前にトップカーストにいた相模は三浦の選考基準に漏れ「二位グループのトップ」でいることを余儀なくされている。また「八方美人」「コミュニケーション能力と、それに伴う交友関係の広さは幾度となく強調される。

対して結衣は勉強が苦手であり、テストの点数も良くない。しかしスクールカーストにおいて「勉強は関係ない」ため、彼女の地位が揺らぐことは無い。加えて結衣は体育祭実行委員長の募集や生徒会選挙のシステムなどに興味を示していないことから、
「オフィシャルな権力」に関する事柄は重要視していない。

このように結衣は雪乃とは反対に「ノンオフィシャルな権力」に重点を置き、「オフィシャルな権力」を軽視していることがわかる。雪乃と結衣は同じ奉仕部の部員でありながら、抛り所にする権力構造が異なっているのだ。

最後に活動内容について。奉仕部の活動内容は大きく二つに分けることが出来る。一つは生徒の悩みや願いを聞き、そのために働く「奉仕」活動である。この活動には顧問である平塚が大きく関与している。平塚は雪乃に対し「優れた人間は憐れな者を救う義務」があることを説き、かつ八幡には「奉仕部で勤労の尊さを学んできたまえ」と命令を下す。さらに平塚は自身が学校行事全般に関わっていることを利用し、その都度奉仕部を学校行事に参加させている。主要なものだけでも、小学生の林間学校のサポート、文化祭、体育祭、生徒会選挙、クリスマスイベント

などが挙げられ、小さなものも含めるとさらに数を増す。こうした活動は公権力、特に学習指導要領に即して言えば「学校においては、地域や学校の実態等に応じて、就業やボランティアに関わる体験的な学習の指導を適切に行うようにし、勤労の尊さや創造することの喜びを体得させ、望ましい勤労観、職業観の育成や社会奉仕の精神の涵養に資するものとする」(傍点は引用者による)という「高等学校の教育の基本」の一つ(31)、言い換えれば(オフィシャル)な傾向の強い活動だと言える。

一方、八幡たちは依頼がなければ各々が好きなことをして時間を過ごす。月日が経つごとに内容は変化し、雑談をするようになったり、紅茶を飲むようになったりする。こうした活動は先述した平塚が唱える精神とは全く異なるもので、部員である三人がそれぞれの関係性を構築する中で生まれる(ノンオフィシャル)な活動である。

このように、奉仕部は部室の位置、部員の抛り所とする権力構造の違い、活動内容の種類と様々な次元で二つの権力が並存する特異な空間なのだ。

4 八幡と二つの権力

では奉仕部は『俺ガイル』の主人公である八幡にどのような影響を及ぼしたのだろうか。

八幡の国語の成績は学年三位ではあるものの、数学の成績は学年最下位である。さらに彼は授業態度も悪く、教員からの心証も悪い生徒であった(32)。つまり(オフィシャルな権力)では低い立場にいたと言える。

また「俺たちスクールカーストが低い連中は上位カーストに出会おうと委縮しちまうんだよな」(二巻八七頁)という発言に象徴されるように、八幡は(ノンオフィシャルな権力)においても地位が低いことに自覚的である。それゆえスクールカーストが強力に作動する教室においては、関わりのないクラスメイトはもちろん、部室では親しげに会話を交わす結衣ともほとんど話をしない(33)。

このように、当初の八幡は両方の権力構造で下位に位置していたと言える。しかし、八幡のこうした状況は、奉仕部に入部してから劇的に変化していく。「働いたら負け」と言い続ける八幡は奉仕部の(オフィシャル)な活動を労働とみなし、積極的に取り組もうとしない。にもかかわらず、彼の関与した学

校行事は、手法に問題はあれども行事自体に大きな失敗はなく、むしろ成功したと言つて良い。ここで八幡は労働に対する対価、ひいては活動に対する評価として、業績という公的な評価を得て、平塚をはじめに、生徒会長の城廻や一色にも認められる。これと同時に、遅刻の描写も二巻を最後に見られなくなり、平塚に呼び出しをされることも「昔」(十三巻三五頁)の出来事として思い返すようになるなど、教員の心証を悪くするような行動を取らないようになっていく。

一方、トップカーストに属する戸部や海老名の依頼や葉山の進路に関する相談など、八幡は奉仕部を通じて(ノンオフィシャルな権力)にも関わる。これらの関わりを通して、彼の教室内での言動も変わっていく。教室内でも結衣と会話をするようになり、結衣以外のトップカーストのメンバーとも簡単な挨拶を交わすようになる。グループ間の交流が無いに等しいクラスの雰囲気の中、トップカーストのメンバーと会話をする八幡は、クラス内の地位もトップカーストと関わるができる位置にまで上昇していると言える。このように八幡は二つの権力が併存する奉仕部で活動することで、結果的に(オフィシャルな権力)〜(ノンオフィシャルな権力)の両方で自

らの地位を上昇させることに成功しているのだ。

5 おわりに

これまで奉仕部に並存する二つの権力構造を明らかにし、八幡がそれらの両方で自身の地位を結果的に上昇させたと結論付けた。

しかし、現実の世界ではそのどちらの権力においても評価や地位を上昇させることはそう簡単ではない。テストの点を向上させたり、学校行事に積極的に参加し業績を挙げたりすることが容易でないことは明らかであるし、スクールカーストについても、鈴木によればスクールカースト内の人間関係は生徒の努力では変えられない、普遍的な権力構造と見なされている。なにより、八幡は奉仕部という特異な共同体にいたからこそ地位上昇を達成できたのだ。三章で挙げた要素のいずれか一つでも欠けていたならば、八幡の地位上昇はなかっただろう。

このように考えると、八幡は決して「オタクを自己責任するライトノベル読者にとつて、リアルで、等身大のヒーロー」ではないことがわかる。確かに八幡個人の特徴を見ていけば、ライトノベル読者が共感し

やすい要素が多分にある。しかし、繰り返しになるが、八幡は総武高校の中で特異な共同体である奉仕部で活動したがゆえに、「カースト最底辺」を脱出している。八幡の友人であり、彼以上にオタクである材木座の言葉を借りれば、八幡はライトノベル読者を知らず知らずのうちに「裏切っていた」（一卷二三一頁）のだ。そうした八幡の語りで成立している『俺ガイル』は、表層では読者に共感を与えながらも、深層では読者を突き放しているテキストだと言えよう。

注

(1) 大橋崇行『ライトノベルから見た少女／少年小説史 現代日本の物語文化を見直すために』(二〇一四年一月、笠間書院)。

(2) ちなみに、マンガ、アニメ、ゲームなど多方面へのメディアミックス展開や、「小説家になろう」などの小説投稿サイトに掲載されたオンライン小説の書籍化などが例に挙げられる。山中智省『ライトノベルよ、どこへいく』(二〇一〇年九月、青弓社)、山中智省「イチゼロ年代のライトノベルへ至る道」(大橋

崇行／山中智省編「ライトノベル・フロントライン 2」所収、二〇一六年五月、青弓社) 参照。

(3) 例えば山中「イチゼロ年代のライトノベルへ至る道」は「大塚英志、東浩紀、笠井潔、三村美衣らがおこなってきた一連の言及」などを通じ「批評・評論界限ではライトノベルへの注目が高まりつつあった」とする。

(4) 久米「ライトノベルと近代文学は異なるか―文学研究の新しい課題―」(『昭和文学研究』第五八集、二〇〇九年三月)、一柳「サブカルチャーと「読む」ことの変容」(『昭和文学研究』第六二集、二〇一一年三月)。

(5) 一柳／久米編『ライトノベル研究序説』(二〇〇九年四月、青弓社) や一柳／久米編『ライトノベル・スタディーズ』(二〇一三年一〇月、青弓社)、大橋／山中編「ライトノベル・フロントライン」1〜3(二〇一五年一〇月〜二〇一六年一二月、青弓社) などが例に挙げられる。

(6) 押野武志編『日本サブカルチャーを読む―銀河鉄道の夜からAKB48まで』(二〇一五年三月、北海道大学出版会) や、西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える 批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』(二〇一七年五月、ひつじ書房) などが例に

挙げられる。

- (7) 例えば前掲『ライトノベル研究序説』では、収録論考は「文化」「歴史」「視点」「読む」の四つに分類されている。

- (8) 「創刊の辞 ライトノベル論宣言」、前掲「ライトノベル・フロントライン1」所収。

- (9) 二〇一一年三月、小学館ガガ文庫。なおこれ以降の『俺ガイル』本文の引用は全て第一刷による。引用元は(〇巻〇頁)と表記し、それぞれ巻数と頁数を示している。

- (10) 二〇一三年一二月、宝島社。

- (11) 「このライトノベルがすごい！」ではキャラクターランキングが男性部門と女性部門に分けられて開催されている。八幡は初登場の「このライトノベルがすごい!二〇一二」(二〇一一年十二月、宝島社)では男性部門ランキング十四位にランクインした。その後最新版に至るまで四位、一位、一位、一位、四位、二位、二位と高順位を繰り返している。また、雪乃や結衣も女性部門ランキングで毎年高順位に名を連ねている。

- (12) 例えば「ぼっちあるあるが切なすぎるレベルで共感できる」(「このライトノベルがすごい!二〇一三」、二〇一二年十二月、宝島社)や「ぼっちで皮肉屋な

のに、共感してしまう」(前掲「このライトノベルがすごい!二〇一四」)などの感想が紹介されている。

- (13) 「青春ラノベ」の(終わり)―『俺妹』『はがない』『俺ガイル』を中心として」、前掲「ライトノベル・フロントライン2」所収。

- (14) こうした試みとしては、山村亮仁「バカとテストと教育論調―教育への抵抗/再生産される教育」(前掲『ライトノベル・スタディーズ』所収)がある。山村は「テキスト内の教育システムと現実の教育を取り巻く論調とを比較・対照」させて論を進めている。『教育には何ができないか 教育神話の解体と再生の試み』、二〇〇三年二月、春秋社。

- (15) 植田「高校生文化と進路形成の変容(第3次調査)単線型教育体系における多様化政策の課題」(科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究報告書)。
<https://kaken.ni.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJFC-T-21330193/21330193seika.pdf>
二〇一八年一月二五日閲覧。

- (17) 中井孝章「学校における「教師―生徒」関係の破綻と修復の方途」、大阪市立大学生活科学部紀要」第四九巻、二〇〇二年三月。

- (18) 文部科学省HP「学習評価に関する資料」総則・評価特別部会、二〇一八年一月十八日資料6-2。

[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chu
kyo3/061/siryo/_icsFiles/afielDfile/2016/02/0
1/1366444_6_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chu
kyo3/061/siryo/_icsFiles/afielDfile/2016/02/0
1/1366444_6_2.pdf)

文部科学省以外では、国立教育政策研究所が「評価
規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資
料」をHPで公開している。

[http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.ht
ml](http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryou.ht
ml)

ともに二〇一八年十二月二十一日閲覧。

- (19) 教育課程とは「学校教育の目的や目標を達成するた
めに、教育の内容を生徒の心身の発達に応じ、授業
時数との関連において総合的に組織した学校の教育
計画である」。文部科学省『高等学校学習指導要領解
説 総則編』、二〇一八年七月。

[http://www.mext.go.jp/component/a_menu/educati
on/micro_detail/_icsFiles/afielDfile/2018/07/
13/1407073_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/educati
on/micro_detail/_icsFiles/afielDfile/2018/07/
13/1407073_01.pdf)

二〇一八年一月二一日閲覧。

- (20) 例えば少年マンガやアニメを好んでいることや、強
い結婚願望を抱いていることが挙げられる(一卷)。
文化祭実行員長を決める際、城廻が言った「委員長
になると結構お得だよ?ほら、内申とか。指定校推
薦狙ってる人には有利だったりするんじゃないかな」

(六巻五七頁)という台詞が象徴的である。

- (22) 鈴木翔「友だち」、本田由紀編『現代社会論—社会学
で探る私たちの生き方』、二〇一五年六月、有斐閣。

- (23) 『教室内カースト』、二〇一二年一月、光文社新書。

以降のスクールカーストに関する説明は鈴木

『教室内カースト』(二〇一二年一月、光文社新書)
による。

- (24) 近年、スクールカーストを含めた若者の友人関係は

「キャラ」を演じることよって成り立っているとい
う指摘も多い(前掲鈴木「友だち」、本田由紀『若
者の気分 学校の空気』(二〇一一年二月、岩波書店)
参照)。八幡はトップカーストメンバーの振る舞いを
「取り繕ってきれいにしている」ものだと捉えてお
り、この点でも八幡の見方は実際の状況を忠実に反
映している。

- (25) 前掲『若者の気分 学校の空気』。

- (26) 十巻では、三浦は自らの進路よりも葉山との関係を
続けることを優先し、文理選択を決断する(十巻三
二七頁)。この三浦の考えに対し、結衣も理解を示し
ている。

- (27) クリスマスイベントの際、八幡は中学の同級生で海
浜総合高校に通う折本かおりと話をする。八幡が奉
仕部の名前を出した時「なにそれ、意味わかんない！」

(九卷一二三頁)と折本が反応していることから、奉仕部は『俺ガイル』内で総武高校のみに存在する部活だと言える。

(28) 『そろそろ、部活のこれからを話しませんか 未来のための部活講義』、二〇一七年二月、大月書店。

(29) なお、『俺ガイル』と空間の関連については、人名と神奈川県の名との関連も見受けられるが、この点については別稿に譲る。

(30) 例えば小学校時代に同級生の女の子に何度も上履きを隠されたことや、中学時代にチェンメルによって傷つけられたことが挙げられる(一巻、二巻)。

(31) 前掲『高等学校学習指導要領解説 総則編』。

(32) 八幡は高校二年生の五月までに計八十回の遅刻をしている。また、調理実習をわざと欠席したり、不真面目なレポートを提出したりするなど、「問題児」的行動が散見される。それゆえ家庭科の鶴見先生は八幡の処置を平塚に「丸投げ」している(一巻)。

(33) 例外として八幡はテニス部所属の男子生徒、戸塚彩加とは頻繁に会話をする。ただし会話を始めるのは常に戸塚であり、その点で八幡は、戸塚を含めた全てのクラスメイトと能動的な関わりは持たないと言える。